

令和元年6月11日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03327

研究課題名(和文) 戦争と慰問文化 慰問の実践とシステムに関する文化史研究

研究課題名(英文) War and Comfort cultures - Researches of Cultural History on Practice and System of Comfort

研究代表者

山崎 明子 (YAMASAKI, Akiko)

奈良女子大学・生活環境科学系・准教授

研究者番号：30571070

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：「慰問」という行為に着目し検証することを本研究課題とする中で、以下の研究成果を得ることができた。各論として婦人活動としての慰問や傷痍軍人への慰問、人形という慰問品、児童文学による啓蒙など、戦争を支持し支援するための社会のサブシステムとして慰問が機能してきたことが明らかになった。法や社会制度が補填しきれない溝を、国民の主体的な物資と労力の提供により補い、戦う主体を支えるためのジェンダー・システムとして極めて重要であると結論付けることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では近代戦において戦争を下支えするために銃後の国民が主体的に慰問を行う文化が形成されたが、その仕組みや実施状況、形態は明らかにされてこなかった。しかし本課題に見るように、日常の様々な文化の中に慰問は位置づけられ、銃後国民生活の中に根付いていた。

慰問文化は主体的行為でありながら曖昧かつ流動的に扱われ、明確な仕組みを持たないムーブメントであったが、その文化の普遍性は多様な文化の検証から明示される。「慰問」の文化史研究により、戦う兵士を銃後国民が常に意識し、強く自己との連続性を持つことにより、戦地と銃後のジェンダー構造が物資のみならず精神のコントロールを行ってきたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：By focusing on civilians' activities of providing "consolation" for soldiers and soldiers' families in modern Japan, and examining women's activities such as sending "comfort bags," visiting sick and wounded soldiers and creating "comfort dolls," and analyzing children's literature during the Asia Pacific War, we reached the conclusion that those activities acted as society's moral support for those directly engaged in the war. Thus, the system in which women provided consolation for soldiers and soldiers' families was extremely important as a gender system to support the (male) subject who fought their war because it compensated for shortcomings of the law and the social system by providing civilian women's voluntary contributions in terms of both materials and labor.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：慰問 歴史 ジェンダー 戦争

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦争とジェンダーに関する研究が多角的に進められる中で、多くの国民が関与・実践した「慰問」文化は、銃後を象徴する活動でありながらその具体的な状況が明らかではなく、また戦争遂行における位置づけも明確にされていない。また、この問題が戦地/銃後をジェンダー化する重要な課題であることに気づいたことから研究プロジェクトを開始した。

2. 研究の目的

戦争時における慰問行為とその実践、およびそれを支える慰問文化のあり方を検証し、戦時社会における「慰問」の意味を解明する。特に、慰問を当該社会におけるジェンダー秩序の問題と位置づけ、その行為および文化の形成とジェンダーの関係性を探ることを目的とする。

3. 研究の方法

5名がテーマ、課題を分担し、それぞれの専門領域に関わる課題を、主に史資料調査とその読解から文献的に研究を行った。また、史資料を展示する施設への見学調査を実施し、戦時における慰問関係資料を探究した。併せて、研究会を開催し、各自の研究成果を報告、それについての情報交換およびディスカッションを行い、分担者以外にも専門家を招聘し情報提供を依頼した。

4. 研究成果

各自の研究成果は、主として報告書「戦争と慰問文化 慰問の実践とシステムに関する文化史研究」(2019年3月)にまとめた。本冊子に示したように、2017年および2018年にはジェンダー史学会においてパネル発表を行うとともに、公開イベント(2018年9月)を開催し広く研究テーマについて周知・公表し、議論の場を設けた。本イベントについても、その内容を上記報告書に所収している。以下、本研究課題の研究成果である。

(1) 国策童話の慰問言説 金の星社『銃後童話読本』を視座として

戦時体制が強化される1937年以降、次世代を担うべき児童に時局を認識させ、物資節約・貯蓄励行の習慣を徹底させるために、また、出征兵士・留守家族・戦死者遺家族・傷痍軍人への慰問の精神を涵養するために、見出された教育装置が「童話」であった。大蔵省・厚生省・文部省・内務省の後援を得て「建設童話」「銃後童話」などと銘打たれて刊行された国策童話のうち、特に慰問に関わる物語群をおさめて版を重ねたアンソロジーである『銃後童話読本』を考察した。(藤木)

(2) 慰問袋研究ノート

これまで漠然と語られてきた「慰問袋」は、日露戦争時にブームがあり、戦時のみならず災害時や困窮者への寄付の形態で実施され、現在も部分的に継続されている。本稿では、慰問袋の定義およびその研究状況を概観したうえで、日露戦争、第一次世界大戦、戦間期、日中戦争、アジア太平洋戦争の各時期における新聞社や企業、地方団体の慰問袋に関わる活動とその規模を明らかにした。また、これまで「日本的」と位置づけられることが多かった慰問袋について、米国での活動を新聞記事等から確認した。(森)

(3) 傷痍軍人とスポーツ 日中戦争下の婦人会慰問活動を中心に

日中戦争長期化による動員兵力の拡大は、膨大な戦傷病者を生み出すこととなり、1937年から1939年にかけて「傷痍軍人」という新たなカテゴリーに類別された男性たちへの国家的援護制度の拡充が急がれた。幅広い国民層による傷痍軍人慰問活動が活発化し、特に高等女学校の生徒たちや各種婦人団体など民間の女性たちによる慰問活動は展開された。注目されるのは、女性たちの慰問の中にスポーツを通じた様々な活動が含まれている点である。傷痍軍人にスポーツをする女性たちを見せ、次第に彼らのスポーツ活動を援助するような仕組みが作られてきたことを明らかにした。(池川)

(4) 戦時下の手芸 十五年戦争期における手芸文化と「手芸」の社会的意味

戦時下において贅沢な手芸品制作は抑制されてきたと考えられてきた。しかし、実際には戦地での有益な慰問品を制作して送ることだけでなく、女性たちが社会に貢献していることを示す重要な行為として手芸制作は戦時を生き続けてきた。戦地では一切不要なレース編みやマスコット制作など、戦時下の手芸の特徴を明らかにするとともに、慰問品制作へと展開される手芸活動の状況を明らかにした。(山崎)

(5) スガモ・プリズンと慰問

1945年11月、アメリカ軍第八軍隷下の第8065部隊が開設した戦争犯罪人・同容疑者を収容した刑務所であるスガモ・プリズンには、1950年6月に朝鮮戦争が勃発したことにより日本人刑務官が派遣された。それまでの米軍による管理とは異なり、所長の斡旋で外部からの慰問活動がはじまったのを皮切りに、スガモ訪問が活発になっていった。スガモには戦犯たちの手で劇場もできていた。日本管理下の「巣鴨詣」はブームとなり、慰問と釈放運動が一体化して展開された。日本人の「心情」と結びついた慰問と釈放運動が、日本の独立とともに援護法の制定、靖国合祀へと収斂していく過程をまとめた。(内海)

(6) 米国調査報告

戦時慰問についての史料を持つ施設を調査し、その概要をまとめた。フロリダ州立大学第二次世界大戦研究所、バーナード・カレッジ・アーカイブ、スミス・カレッジ・アーカイブ。(森)

(7)戦争ドキュメンタリー 「告白～満蒙開拓団の女たち～」上映 その制作と受容をめぐって

NHK 名古屋放送局制作ドキュメンタリー「告白～満蒙開拓団の女たち～」は、一つの開拓団の引揚げをめぐって女性たちの扱いと開拓団の選択を問う番組であった。本作品の上映および製作者の講演、さらに研究会メンバーによる鼎談により、戦争とジェンダー、そして女性たちの提供される身体性について議論を行った。本研究成果は、記録を報告書に掲載している。

以上、本研究課題についての代表的な研究成果についてまとめた。そのほかにも、研究会報告および、学会報告、その他調査記録等も今後研究成果としてまとめていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

1. 内海愛子・奥田豊己、泰緬鉄道 犠牲と責任、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報、無、16、2019、26-33
2. 内海愛子、戦争裁判 裁かれた者たちの「記録」と「記憶」、世界、無、917、2019、200-210
3. 内海愛子、スガモプリズン 戦犯たちの「自治」と「自主活動」、季刊戦争責任研究、無、91、2018、14-30
4. 山崎明子、戦時下の手芸 十五年戦争期における手芸文化と「手芸」社会的意味、千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書、無、333、2018、151-163
5. 藤木直実、被傷性とゆるやかな連帯と 梨木香歩『僕は、そして僕たちはどう生きるか』を読む、日本児童文学、無、64(5)、2018、58-61
6. 内海愛子、戦後日本の「平和主義」と朝鮮 残された植民地朝鮮の清算、在日総合誌 抗路、無、4、2017、6-20
7. 内海愛子、日本人の植民地認識と教育、植民地教育史研究会年報、無、19、2017、3-10
8. 藤木直実、家庭への包摂と逸脱 与謝野晶子と三越、国文目白、有、54、2016、251-266

〔学会発表〕(計11件)

1. 池川玲子、高校野球と女子 禁制と解禁をめぐる百年史、総合女性史学会、2019
2. 池川玲子、傷痍軍人とスポーツ 日中戦争下の婦人会慰問活動を中心に、ジェンダー史学会、2018
3. 藤木直実、国策童話の慰問言説 金の星社『銃後童話読本』を視座として、ジェンダー史学会、2018
4. 山崎明子、特攻兵と慰問人形 手作りの贈答品による「励まし」と「慰め」、ジェンダー史学会、2018
5. Ikegawa Reiko, Pretty Women in Uniform during the Wartime and Occupation Eras, WELL Conference and Retreat, 2017.
6. Ikegawa Reiko, Japanese women in Manchuria Film Association (Man'ei): Nationless lives, imperialist discourses and filmmaking practices, Korean Association of Women's History, 2017.
7. 森理恵、「慰問袋」送出活動の変遷 - 日露戦争～太平洋戦争 - 、ジェンダー史学会、2017
8. 山崎明子、『日本婦人』にみる「慰問」ディスクール、ジェンダー史学会、2017
9. 池川玲子、謎の胎盤人形 見世物と医学のはざま、イメージ&ジェンダー研究会、2016
10. 池川玲子、明滅する『青鞥』 占領下映像の中の「日本女性史」、ジェンダー史学会、2016
11. 藤木直実、「妊娠」を奪取する 女性作家による「妊娠」表象を読む、イメージ&ジェンダー研究会、2016

〔図書〕(計8件)

1. 藤木直実、反体制のアラベスク 円地文子、今井久代・中野貴文・和田博文編、女学生とジェンダー、笠間書院、2019
2. Utsumi Aiko, "Reconciliation" in postwar history: The need for resolution resulting from Japan's colonial period," Yasuko Claremont ed., *Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation: Wounds, Scars, and Healing*, Routledge, 2018.
3. 池川玲子、胎盤人形 見世物と医学と美術のはざま、山崎明子・藤木直実編、妊婦 アート論 孕む身体を奪取する、青弓社、2018
4. 池川玲子、女優原節子の住んだ家 映像表現の中の家父長制、今関敏子編、家の文化学、青簡舎、2018
5. 藤木直実、「妊娠」を奪取する 女性作家による「妊娠」表象を読む、山崎明子・藤木直実編、妊婦 アート論 孕む身体を奪取する、青弓社、2018
6. 内海愛子・加藤陽子、歴史を学び、今を考える 戦争そして戦後、梨の木舎、2017
7. Utsumi Aiko and Udagawa Kota, "The post-war of the BC-class war criminals: How did

war criminals react to the Australian trials?,” Geogina Fitzpatrick, Tim McCormack and Narrelle Morris, *Australia’s War Crimes Trials 1945-51*, Brill Nijhoff, 2016.

8. 藤木直実、宇野千代「老女マノン」までの軌跡 モダンガールとしての女給の肖像、新フェミニズム批評の会編、昭和前期女性文学論、翰林書房、2016

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：池川 玲子

ローマ字氏名：IKEGAWA Reiko

所属研究機関名：大阪経済法科大学

部局名：アジア太平洋研究センター

職名：研究員

研究者番号（8桁）：50751012

研究分担者氏名：内海 愛子

ローマ字氏名：UTSUMI Aiko

所属研究機関名：大阪経済法科大学

部局名：アジア太平洋研究センター

職名：教授

研究者番号（8桁）：70203560

研究分担者氏名：藤木 直実

ローマ字氏名：FUJIKI Naomi

所属研究機関名：日本女子大学

部局名：家政学部

職名：研究員

研究者番号（8桁）：90636185

研究分担者氏名：森 理恵

ローマ字氏名：MORI Rie

所属研究機関名：日本女子大学

部局名：家政学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00269820

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。